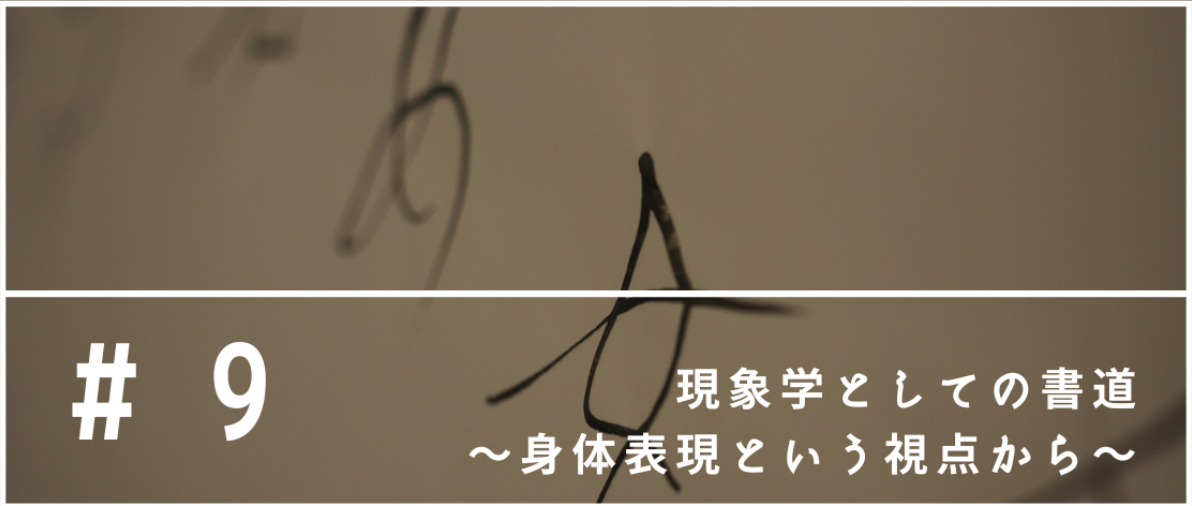




9

現象学としての書道 ～身体表現という視点から～

生涯発達支援塾TANE 櫻井育子

はじめに

体育という教科が苦手だった。それは集団行動だったからだと思う。もしこれが、自分で好きなように動いていい、走っていい、転がっていい、という時間だったらなんとかなったのかもしれない。などと考えることがある。他者と比べて劣っている状態、あるいは目に見えて「できない」という評価は、大人が思っている以上に子どもには辛い世界である。教育改革が叫ばれて久しいが、現場から「できる」「できない」という評価軸を取り外しつつ、自己成長欲求を純粋に育てるか（あるはその欲求を潰さないように扱うか）というのが、新しい教育のスタイルになるのではないか、そしてそのことのヒントに「書と身体表現」から考えてみたい。

言語と文字と書道教育

人間という生き物である以上、身体を動かすこと自体は好き、嫌いではなく本能であり、音楽を聴いて身体が動く、などはもはや自然現象であり、古くから「うた」「踊り」はどの民族にも存在する。そもそも文字がなかった時代、生きていく範囲が狭い時代には口から口へ、あるいは身体から身体へ、と伝わってきた音声言語。そこにはおそらく微細な身体の違い、発音の違い、誤差、さまざまなものを含んでいたに違いない。一方で文字言語は広大な土地を支配する過程で生まれた「脳外記憶システム」であり、支配者が生み出したものである。それゆえ、文字を習得するためには「習う」ことが必要であった。その後あらゆる学問は「文字言語」によって拡大していく。

日本においても文字の使用によって多くのことが発展してきた。とくに日本はそもそも話していた「和語」に「漢字」を当てはめるといった複雑な文字の発展であり、さらには漢字から「ひらがな」を生み出し、和様と呼ばれるさまざまな書流を生み出し、それはやはり独自性、創造性、競争性を帯びながら発展してきた。とはいえ、そのうち「手習」としての「読み書き算盤」が庶民に広がる中で、現在の学校教育に残っている「書道」は、もはや文化というよりは「手習」としてのものである。したがって、「書写教育」は学校で体験する範囲においては本当に狭く、書道の中でも「手習い」の部分である。「習字」＝「書道」のままでは、まだ知らない世界への入り口を閉ざしてしまっているのではないかと感じている。

身体表現としての「書道」

最近「書道パフォーマンス」という分野がクローズアップされたこともあり、まるでダンスのような筆捌き、足並みの揃え方、大きな身体の動き、などを見ると確かに身体表現であると思われるかもしれない。しかしながら、そこまで大袈裟なことではなく、そもそも筆で文字を書くということ自体が、微細な身体表現である。身体の特徴、筋肉のつき方、姿勢、呼吸の仕方、時間感覚、それらは実は誰一人として同じではない。このことだけを捉えても、そもそも「自分のくせ」のようなものが書には必ず表れる。

奈良時代にさまざまな書流が生まれているが、当時はもはやあそび感覚でさまざまな文字の「崩し方」を研究し、まるで筆と戯れていたのではないかと思う。

指先や足先の緊張感、体重移動、空間把握、実は「書く」とときにはかなりの感覚と筋肉が連動し、それだけではなく呼吸も変化する。先日、東北舞踏集団「三角標(ミガクシ)」という団体の舞踏公演を観る機会があったのだが、まさにその動きは「筆遣い」と一致するかのような錯覚を覚えた。身体ひとつで表現しきる「舞踏」、空間的な広がり指先の動きひとつで作っていく。そもそも書道は、「紙の上のダンス」であると、書家の斉藤文春さんはいつも言っている。筆と紙とが出会う瞬間の緊張感や、そこで立ち現れる相互の絶妙な力加減、抜き具合、どこまでこの線を引いていくか瞬時に感じて筆を持つ手だけではなく、下半身をどう使えばその力を有効に使い切って良い線が引けるのか、、、など。このあたりの身体感覚も、「書道」の中には含まれているが、このことについてはほとんどの方が「味わう」ことなく、単なる「書写教育」を終えてしまうことになる。自分の身体をどう使えばいいのか、そしてそれは精神的な安定にも、もちろん影響する。

手習としての書写教育から、表現としての書道教育へ

要は、「もっと書道はおもしろい」という話なのである。手習的要素のある誰でも書けるようになる美文字的な展開、観光客向けの書道体験も、インパクトのある書道パフォーマンスも、もちろん「書道」に親しんでもらうための新しい文化だ。一方で、まだ既得権益のある書道業界は公募展や入賞してこそその世界があり、狭い世界での妙な伝統を守りすぎている。文字が伝来し、純粋に書体が増え、思いつきで書き綴っていた時代に、「伝統を守る」などの動きよりももっと「最先端を行こう」としている文化人がいたのではないかとすら思う。

ほとんどの文書作成がパソコンとスマホになり、印刷技術も革新され、紙や素材もこんなにも開発されている現代において、そろそろ書写教育ではなく、身体的文化資本としての「書道」をすべての子どもたちに提供していかなければならない。それはつまり、「芸術教育」あるいは、「自己表現」として書道というものを位置づけることにより、これまでの評価軸が変化していくと思っている。

できる限り、学校という公共の場から、評価をなくしていくこと。本来持っている成長欲求は、評価されず、比べられず、やってみたいことを実現できる環境があってはじめて育つのだと思う。無駄に評価しすぎることの弊害、そういう過去の感覚からどんどん新しいものが生まれてくる時代に突入している。新しい書道教育の在り方についても提案し続けていきたいと思う。

櫻井 育子（生涯発達支援塾TANE 代表）

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家、書道ファシリテーター、生涯発達コーディネーター。

「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつながりをコーディネート。

「全国すみあそびproject」、「書と生き方研究所」、実施中。<http://ikuko-sakurai.com>